

# 行政圏域から生命圏域への転換

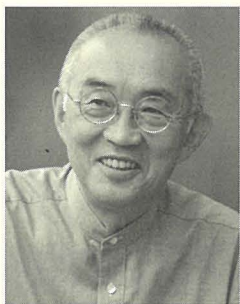
東京大学名誉教授  
つきお よしお  
月尾嘉男

## 文化を軽視した市町村大合併

ここ数年、大騒ぎであった平成の市町村大合併もいったん終息し、三二〇〇程度であった市町村数は約四〇%減少し、一八〇〇程度になった。明治初期の町村が七万以上あった時代から計算すれば、この一二〇年で二・五%にまで圧縮されたことになる。この変遷には人口の増加、交通・通信手段の発展、地方公共団体

の業務の拡大、地域運営の効率の向上など様々な理由があり、回避できない潮流であるが、当然、一方では問題も発生している。

まず地域の歴史のある名称の消滅である。現在は安曇野市の一部である長野県豊科村は由緒ありそうな名前であるが、明治初期に鳥羽、吉野、新田、成相の四村の合併のとき、各村の最初の仮名を集結したものであ



る。現在では山梨県韮崎市の一部である清哲という村名はより巧妙で、水上、青木、折居、樋口という四村が合併するとき、それぞれの漢字の部首を合成した苦心の名前である

が、民俗学者柳田国男も批判している事例である。

このように合併は文化の視点を軽視しているが、より重要な問題は自然の視点を無視していることである。三重県中央部に宮川という一級河川がある。水質では何度も日本一位になった清流であるが、源流から河口まで一二の行政区域を通過する。上流地域が河川を汚染させないとか、中流地域が取水に配慮するなどの協力がなければ清流は維持できないが、延長九〇キロメートルにもなる河川では上流と下流の意思疎通は困難である。

## 自然と文化を一体とする生命圏域

このような問題に対処すべく登場したのが「生命圏域」という概念である。英語の「バイオリージョン」を翻訳したものであるが、地質や気象や生態などの自然、習慣や言葉や食事などの文化が類似する地域を一体として維持していくという発想である。アユは行政区域に関係なく河川を上下するし、かつて交通手段が発達していなかった時代には、川沿

いを人々は往来していたから下流から上流まで共通した自然と文化が存在していた。

したがって一本の河川の流域は生命圏域であるし、海洋で隔離された孤島、周囲の山脈で外部との往来が制限されている盆地、細長く突出している半島、岸辺に多数の集落が存在する湖水などはすべて生命圏域である。これらの地域では土壌や気象の条件が類似しているから作物も類似し、頻繁に交流しているから言葉や習慣も共通である。そうであれば容易に一体として地域を維持することができる。

これまで人類は開発という美名で自分を納得させ、自然を収奪しながら発展してきた。しかし、鉱物資源も生物資源も収奪が限界に接近してきた現在、さらなる発展をするために便益や効率を増大させる行政区域の再編は重要ではないし、それによって人類の存続の基盤である自然を維持することも困難である。そこで自然を維持することを第一の目的とする生命圏域が重要な概念として注目されるようになったのである。

## ディープ・エコロジーの登場

一九七〇年代前半、ノルウェイの哲学教授アルネ・ネスが「シャロウ・アンド・ディープ」という論文を発表した。自然において人間が優越した地位にあるのではなく、自然の一部でしかないという思想でなければ環境は保全できないという内容であり、それをディープ・エコロジーと命名した。山川草木悉皆成仏という觀念に馴染みのあるわれわれには理解できるが、一神教的な宗教を根底とする西欧社会には衝撃であった。

それを現実に実現していく方法の一種が生命圏域である。もちろん最大の生命圏域は地球であるが、ある生態系内で相互に依存しあう森羅万象を対象にした区域を思考の対象にしなければ、これからの地域は維持できないのである。生命圏域も「MOTAINAI」と同様、あまりにも身近であるために外部から指摘されて気づいたわけであるが、日本伝統の宇宙や自然についての意識が重要な意味をもつ時代が到来しているのである。